

遣隋使の見た隋の風景

―「開皇二十年の遣隋使」の理解をめぐる―

氣賀澤保規

明治大学

はじめに

607年の小野妹子による遣隋使は、日本古代史上の一大トピック、さらにいえば日本史上の大きな節目に連なる出来事であった。日本（倭国）は遣隋使においてはじめて自らの判断で大陸隋と接触し、自前の外交を展開したと考えられるからである。

小野妹子が派遣された時、隋は2代目の煬帝の治世であり、隋の盛時を迎えていた。煬帝の大業5年時（609）、「是の時、天下およそ郡一百九十、県一千二百五十五、戸八百九十万有奇あり。東西九千三百里、南北万四千八百一十五里なり。隋氏の盛、此に極まる。」（『資治通鑑』巻181）という記述がそのことを裏づける。こう表現される隋の盛況は、開皇9年（589）に400年にわたる長い南北の分裂に終止符をうった文帝のもとで、内政に力を入れ国力の充実がはかられてきた結果であることは言をまたない。そしてもう一つ、周辺民族との関係が隋の優位という形で次第に落ち着いてきていたことにも負っている。とりわけ隋の成立以来、北で威勢をふるった突厥が、東西への分裂、東突厥内での対立をへて、文帝の開皇19年（599）頃には隋に支援された啓民可汗で一本化され、北辺の悩みを解放させたことは大きかった。

こうした文帝時代の国内の整備充実と北辺の安定をうけて、煬帝はさらに運河の開鑿による南北の統合を進め、その上で東アジア全域に本格的に影響力を拡大させることに乗り出した。そこでまず西の吐谷渾へ遠征し、西域諸国を隋側に引き入れ、ついで東方に矛先をむけた。当時遼水から以東、朝鮮半島にかけての領域を割拠した高句麗・百済・新羅の3国のうち、百済・新羅の2国は隋の冊封をうけていたが、高句麗だけは隋の意のままに動かず、独自の道を歩もうとしていた。その結果がよく知られた煬帝の3度にわたる高句麗遠征（612・613・614年）となるわけである。

だが同時に忘れてはならないのは、これに先立つ開皇18年（598）に、文帝による高句麗遠征が断行され、隋は最初の敗北を喫していることである。これをあわせ隋代には都合4度の高句麗への出兵があり、結局膨大な兵力を動員しながら最後ま

で相手を圧倒することができなかった。そしてこのことが引き金となって、煬帝治世の後半、文帝以来の蓄えを使いつくし、全土にまき起こった反乱のなかで、隋は滅亡に追い込まれていく。このように隋が南北の統一を果たし、国力を増大させ、その結果文帝末期から対外的膨張路線へと踏み出し、煬帝になってそれが一層規模を増し体系的に強行される、まさにそうした時期に倭は隋との外交活動を始めるのである。それゆえ遣隋使には一層重い歴史的使命が感じられるのである。

ただ従来からの遣隋使研究に目を向けてみると、その多くは使者を出した倭の側の事情や関心から取り上げることに力点が置かれてきた。そのため、当時の隋の力量や文化の水準あるいは隋の実情を意識したところの遣隋使の考察は、必ずしも十分ではなかったように思われる。また遣隋使問題に言及した中国史の側からの研究も、東アジア国際関係から倭の位置づけに迫るものであっても、隋の国情そのものがあり射程には入っていない。これまで倭の使節たちは圧倒的な国力の差、体制の違いを目の当たりにし、それが聖徳太子の下での国造りに刺激を与えたことは指摘されてきている。しかし彼らは隋で何を見、何を肌で感じ取ったかはほとんど話題にされてきていない。だが本当はそこが問題になるのではないか。そのような関心と視角から本報告をまとめることにする。

1. 遣隋使関係資料をめぐる理解と課題

遣隋使を知る手がかりは基本的に二つの史料に限られる。一つは『隋書』倭国伝（以下「倭国伝」）であり、もう一つが『日本書紀』（以下『書紀』）の関係年次の記事である。遣隋使の理解を進めるためには、まずそれらを押さえ直して見る必要があるだろう。以下両史料の関係記事を提示し、従来から課題となった主たる点を集約してみることにする⁽¹⁾。

（1）『隋書』巻81・倭国伝

①開皇二十年（600年）、②倭王姓阿每，字多利思比孤，号阿輩雞弥，遣使詣闕。上令所司訪其風俗。③使者言倭王以天為兄，以日為弟，天未明時出聽政，跣趺坐，日出便停理務，云委我弟。高祖曰，此太無義理。於是訓令改之。④王妻号雞弥，後宮有女六七百人。名太子為利歌弥多弗利。

無城郭。⑤内官有十二等，一曰大德，次小德，次大仁，次小仁，次大義，次小義，次大礼，次小礼，次大智，次小智，次大信，次小信，員無定数。有軍尼一百二十人，猶中国牧宰。八十戸置一伊尼翼，如今里長也。十伊尼翼属一軍尼。

⑥（中略——倭国の風俗・生活様態）

⑦有阿蘇山，其石無故火起接天者，俗以為異，因行禱祭。有如意宝珠，其色青，

大如雞卵，夜則有光，云魚眼精也。⑧新羅・百濟皆以倭為大国，多珍物，並敬仰之，恒通使往来。

大業三年（607年），其王多利思比孤遣使朝貢。⑨使者曰，聞海西菩薩天子重興佛法，故遣朝拜，兼沙門數十人來學佛法。⑩其國書曰，日出处天子致書日没处天子，無恙云云。帝覽之不悅，謂鴻臚卿曰，蠻夷書有無礼者，勿復以聞。明年（608年），⑪上遣文林郎裴清使於倭國。（中略）

倭王遣小德阿輩台，從數百人，設儀仗，鳴鼓角來迎。後十日，又遣大禮哥多毗，從二百餘騎郊勞。既至彼都，⑫其王與清相見，大悅曰，我聞海西有大隋，礼義之國，故遣朝貢。我夷人，僻在海隅，不聞礼義，是以稽留境内，不即相見。今故清道飾館，以待大使，冀聞大国惟新之化。清答曰，皇帝德並二儀，沢流四海，以王慕化，故遣行人來此宣諭。既而引清就館。其後清遣人謂其王曰，朝命既達，請即戒塗。於是設宴享以遣清，復令使者隨清來貢方物。⑬此後遂絕。

上の引用史料中に傍線を付したところをめぐって，以下のような問題点の指摘がなされている。

- ①「開皇二十年」の遣使。後述するがこの年の遣隋使の記事はこの「倭国伝」にあつて『書紀』にはない。したがつて『書紀』の記述を重視する立場（本居宣長以来）から，この開皇二十年にかかわる記事は正式な倭国の使節のものではないとみなされてきた。しかし戦後は開皇二十年使節の存在が共通認識になりつつある。この解釈の転換がなぜ生まれることになったのか。開皇二十年の遣使をいうための論証は十分であろうか。
- ② 倭王の姓が阿毎，字が多利思比孤，号が阿輩雞弥とあることの理解。とくに阿輩雞弥（アホケミ）は大王，天王，大君，天君などとして天皇に先行する称号と解されるが，ではこの場合「阿毎の多利思比孤」とは誰にあたるのか。
- ③ 倭の使者が隋の高祖（文帝）の質問に答え，倭王が天を兄とし，日を弟としたという論理はどこから来るか。これを聞いた高祖が「此れ太だ義理無し」「訓えて之を改めしむ」とした意味，「之」が直接指すところをどう理解したらよいか。
- ④ 倭王の妻の呼称が「雞弥」であつたとすると，当時倭王は男性であつたと理解された可能性が生まれる。その場合，推古天皇（女帝）との関係はどうなるか。倭の側はそれを伏せて隋に倭王のことを伝えたのか。また太子の名で「利歌弥多弗利」は「和歌弥多弗利（ワカミタヒラ）」と理解されるが，それは厩戸皇子（聖徳太子）とつながるか。
- ⑤ 「内官に十二等有り」という12等級の官名は，推古11年（603）12月に実施された冠位十二階と同じとみなせるが，「倭国伝」では開皇二十年（600）のことに

かけている。この年号の齟齬をどう捉えるか。603年に実施され、本来後にくるべき記事が倭国伝で前に混入したのか、あるいはそもそも「倭国伝」の600年に見える遣使じたいが信用できないのか、議論が割れるところとなる。

- ⑥「倭」の風俗・生活様態。本稿ではその部分はやや長くなるため史料をあげることは省略したが、内容は男女の風俗、刑罰や娯楽、気候・風紀や冠婚葬祭など、多岐にわたる興味深い記事が盛り込まれ、当時の倭国を知る貴重な材料となる。しかし見方を変えると、そこに一貫した未開的あるいは民度の低い社会実態が印象づけられる。とするとその様態は、倭＝大和政権下の様子を描写したものか、改めてその未開性の意味と実態をどう認識するかの検討が求められる。
- ⑦「其の石、故無くして火起り天に接す」ところの「阿蘇山」をどう理解するか。この存在が一つの理由になって、開皇二十年（600）の遣使記事を九州方面の地方豪族のそれとみなす説が生まれるが、阿蘇山とはそのような地方性の象徴ですませるものでよい。
- ⑧「新羅・百済は皆倭を以て大国と為す」という記事の実態をどう理解するか。この記事が古代における日本（倭）を中心とした朝貢関係をいう論拠となり、小中華説が生まれるが、当時の国際関係や倭の力量からそのことは可能であったか。
- ⑨「海西の菩薩天子〔である隋皇帝〕が重ねて仏法を興す」と倭の使者がいう菩薩天子とは、誰を指しているのか。文帝か煬帝か。それをどちらに特定するかで、「開皇二十年」の遣使記事の意味が変わってくる。また「兼ねて沙門数十人を来りて仏法を学ばしむ」というが、沙門数十人という数の多さは信用できるか。また後述の『書紀』でいう人数・時期との関係をどう理解するか。
- ⑩倭の「国書」でいう「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す」と帝（煬帝）の「不悦」「無礼」とした反応との関係をどう解釈するか。「悦ばず」「無礼」とした理由を倭が対等の天子と称したことにあるか、倭を日出ずる、隋を日没すると表現したことか、その両方合せて隋側は非難したのか。
- ⑪隋が文林郎裴世清を「倭国に使いせし」めた理由・目的は何か。文林郎は煬帝時、皇帝に直属しその文書の書写記録を担当する秘書省の最下位、従八品のポストであった。従来文林郎というと、文帝の時に整った散官（文散官）の最下位（従九品上）のそれにあてられてきたが、これは修正される必要がある。おそらく裴世清はその立場から煬帝の直々の命をうけて使者となったはずであるが、なぜ「無礼」と怒った対象に使者を出すことになったのか。目的は返礼としてか冊封のためであったのか。
- ⑫裴世清が「其王」たる倭王に拝謁したおり、倭王は「大いに悦び」「大隋は礼儀の国、故に遣りて朝貢せしむ。我は夷人、海隅に僻在す」と述べたという。⑨の

箇所で「日出处天子」から「日没处天子」へと対等さを主張し、ここではみずからを「海隅」の地に生きる「夷人」で、隋に「朝貢」したという。この姿勢の懸隔さをどのように理解したらよいか。記述の作為性を考えないとすると、倭の姿勢は隋使裴世清に会うことで180度に近い転換がなされたと解される。あるいはみずからを夷人と認めて朝貢したということは、その先に冊封関係が意識されていたとならないか。

- ⑬ 最後の「此の後遂に絶つ」という文句の理解。倭国伝では妹子の大業4年(608)の再訪を遣隋使の最後とみなすが、しかし『隋書』の他の部分や『日本書紀』の記事から、遣使はその後もあった可能性が高いとみなされている。とすると倭国伝ではなぜそのような記述で締めくくることがになったのか。隋から見て、本当はその後も正式な使者の受け入れがあったのか。

(2)『日本書紀』巻22・推古紀

(1)の『隋書』倭国伝の場合と同様に、『日本書紀』からも多くの直接的な疑問点や問題点が引き出せるが、ここでは一番問題になる妹子が裴世清をともなって帰国したところから、従来議論になってきた箇所にふれてみたい。

〔推古天皇・十五年(607)〕秋七月戊申朔庚戌(3日)、①大礼小野臣妹子遣於大唐。以鞍作福利為通事。

十六年(608)夏四月、小野臣妹子至自大唐。々国号妹子臣曰蘇因高。即大唐使人裴世清・下客十二人、從妹子臣、至於筑紫。遣難波吉士雄成、召大唐客裴世清等。為唐客更造新館於難波高麗館之上。

六月壬寅朔丙辰(15日)、客等泊于難波津。是日、以飾船卅艘、迎客等于江口、安置新館。於是、以中臣宮地連烏摩呂・大河内直糠手・船史王平為掌客。②爰妹子臣奏之曰。臣參還之時、唐帝以書授臣。然經過百濟国之日、百濟人探以掠取。是以不得上。於是、群臣議之曰、夫使人雖死之、不失旨。是使矣何怠之、失大国之書哉。則坐流刑。時天皇勅之曰、妹子雖有失書之罪。輒不可罪。其大国客等聞之、亦不良。乃赦之不坐也。

③秋八月辛丑朔癸卯(3日)、唐客入京。是日、遣飾騎七十五匹、而迎唐客於海石榴市術。額田部連比羅夫、以告礼辞焉。

④壬子(12日)、召唐客於朝庭、令奏使旨。時阿倍鳥臣・物部依網連抱、二人為客之導者也。於是、大唐之国信物置於庭中。時使主裴世清親持書、兩度再拜、言上使旨而立之。⑤其書曰。皇帝問倭皇。使人長吏大礼蘇因高等、至具懷。朕欽承宝命、臨仰区宇。思弘德化、覃被含靈。愛育之情、無隔遐邇。知皇介居海表、撫

寧民庶，境内安樂，風俗融和，深氣至誠，遠脩朝貢。丹款之美，朕有嘉焉。稍暄。比如常也。故遣⑥鴻臚寺掌客裴世清等。稍宣往意。并送物如別。時阿倍臣出進，以受其書而進行。大伴齧連，迎出承書，置於大門前机上而奏之。事畢而退焉。是時，皇子諸王諸臣，悉以金髻花着頭。亦衣服皆用錦紫繡織及五色綾羅。

丙辰（16日），饗唐客等於朝。

九月辛未朔乙亥（5日），饗客等於難波大郡。

辛巳（11日），唐客裴世清罷歸。則復以小野妹子臣為大使，吉士雄成為小使，福利為通事，副于唐客而遣之。爰天皇聘唐帝。其辞曰。⑦東天皇敬白西皇帝。使人鴻臚寺掌客裴世清等至，久憶方解。季秋薄冷，尊何如，想清愈。此即如常。今遣大札蘇因高・大札乎那利等往。謹白，不具。是時，⑧遣於唐国学生倭漢直福因・奈羅訖語恵明・高向漢人玄理・新漢人大罔，學問僧新漢人日文・南淵漢人請安・志賀漢人恵隱・新漢人広濟等，并八人也。（中略）

〔十七年（609）〕秋九月，小野臣妹子等，至自大唐。唯通事福利不来。（中略）

⑨〔二十二年（614）〕六月丁卯朔己卯（13日），遣犬上君御田歟・矢田部造於大唐。（中略）

二十三年（615）秋九月，犬上君御田歟・矢田部造，至自大唐。百濟之使，則從犬上君而来朝。

- ①『書紀』ではこれ以後，隋をすべて「唐（大唐）」と表記するが，なぜあえて隋という正式な国名を用いようとししないのか。従来一般的な説明では隋が短命に終わったので，次の唐とあわせて標記することで煩雑を避けたとなるが，はたしてそのような理解は合理的だろうか。
- ② 小野妹子「隋の国書」紛失事件について。唐（隋）帝から授かった国書を妹子は百濟を通過したおりに百濟人に略奪されたと報告し，妹子処分問題に発展するが，この略奪紛失事件は確かなことか。妹子は国書の提出を意図的に避ける必要があり，略奪事件をでっちあげたのか。その場合国書の中身はどのようなものであったのか。あるいは最初から国書はないのを，妹子が存在したかのように話を作り上げたのか。
- ③ 隋の使者一行は6月15日（丙辰）に難波津に到着してから8月3日（癸卯）まで，ひと月半以上待たされた。この間国書紛失事件で妹子の処分問題に揺れていたとしても，使者には礼儀を欠く対応とならないか。もっと別途の問題（東アジア戦略など）が朝廷側で論じられていた可能性は考えられないか。
- ④ 裴世清の倭王にたいする儀式次第・儀礼形式・会見場面をどう具体的に再現できるだろうか。とくに隋使との会見の席に立ち会ったのは誰か。天皇（推古）の関

与はどうか。

- ⑤ 使者の宣する隋帝の「国書」の中身を倭側ではどう受け止めたか。隋帝は倭が遠く「朝貢」してきたことに、「徳化」の立場で応える趣旨のことをいっている。
- ⑥ 「鴻臚寺掌客裴世清」の鴻臚寺掌客は、正式には鴻臚寺典客署掌客にあたると思われるが、それであれば『隋書』百官志下の文帝時の官品で正九品下となる。外国使節を担当する鴻臚寺の官員が使者となったのは理解できるが、「倭国伝」では文林郎（前掲⑩）とあり、両肩書きの違いをどのように理解するか。
- ⑦ この倭の国書になって「東天皇敬みて西の皇帝に白す」として天皇—皇帝の形で表記する。ただし天皇号はこの時期まだ成立していないとすると、この国書そのものの作為性が浮上する。また「敬白」形式にこめられた隋に対する倭の側の認識、位置関係の認識をどう理解するか。
- ⑧ 妹子に同行する8名の学生・学問僧の問題。「倭国伝」では「沙門数十名」が妹子の最初の遣使の時（607年）に同行したとなっている（前掲⑧）。年次の1年のずれ、人数のちがいをどのように説明するか。「倭国伝」と『書紀』とで共通するのは“2回目で学生・学問僧を帯同したという形”をとる点である。とすると開皇二十年の遣使の意味はこの点と関連づけてどう説明できるだろうか。
- ⑨ 「倭国伝」では608年以後関係が途絶したとあったが（前掲⑬）、ここでは犬上御田鍬が派遣されたといい、帰国時には「百済之使」を伴ったという。両記事の違い、百済の使者がかかわる理由はどう理解したらよいのか。

（3）全体にまたがる課題として

前項（1）と（2）では『隋書』倭国伝と『日本書紀』推古紀のそれぞれから直接導き出される主たる課題や問題点を列記してみた。史料をめぐる主要な論点はほぼそのなかで出されているが、さらに両史料にかかわって浮上するより大きな課題を補っておくことにしよう。

- 1) 開皇二十年（600）の遣使の現実性。
- 2) 遣隋使の派遣回数の問題をどう理解するか。
- 3) 当時の東アジア情勢をめぐる理解と倭の東アジアに占める位置。
- 4) 倭の遣隋使の目指したものは何か——倭と朝鮮半島情勢、隋の高句麗遠征と倭の関係、仏教をめぐる倭の立場。
- 5) 倭の王権の性格および倭国の実態をどう理解するか。
- 6) 隋の東アジア政策と倭の「小中華主義」の立場の理解問題。
- 7) 隋はなぜ裴世清を送ったか——冊封使か、答礼使か。
- 8) 両史料に存在する作為性の問題——後世の改変・作為をどう取り除くか。

9) 『書紀』に一貫する「大唐」の表記の背後に何があるか。

2. 遣使の回数と従来の理解の問題点

遣隋使の問題はすでに述べてきたように、よるべき史料が基本的に『隋書』と『日本書紀』の二つに限られ、しかも記事を詳細に分析していくと多くの課題がのこされ、簡単に一本化できない困難さが終始ついてまわる。そのなかで従来からきまっ取り上げられ、なおその都度異論が出されてきているのが、遣隋使の回数をめぐる問題である。

『隋書』において倭をめぐる記事は、「倭国伝」のほかに煬帝本紀に2箇所、流求国伝に1箇所あり、それに『日本書紀』をからめることで、最大合計6回の遣隋使があったという見解が導き出される。そのことを正面から指摘したのが増村宏氏であり⁽²⁾、氏の資料考証の徹底ぶり、そして資料が存在することじたいに重みを見出す基本姿勢によって、6回説を支持する意見が根づよくあった。ちなみに関係史料を集約し、隋側と倭側との史料を対応させ、6回説の史料的背景を示したのが、「遣隋使関係資料比較対照表」となる（本稿の最後に掲上）。

今ここで遣隋使の回数問題に全面的に踏み込む余裕はないが、一つだけ従来の見解にたいし別の見方を示しておきたい。すなわち従来ほぼ一致して実行されたと認める推古22年（614）6月、「犬上御田歙・矢田部造を大唐に遣わ」したとされる最後の遣隋使である。この使節は翌615年にどうしたことか百済の使者を伴って帰国した。これは「倭国伝」の最後に、608年の小野妹子第2次使節で「此後遂絶」と記載されたのち、6年ほど経過してからの動きとなる。このことじたいさらに論議される必要があるが、加えて614年－615年という時期の隋の情勢である。

614年（大業10）という年は、煬帝による第3回高句麗遠征が強行されていた。その2月煬帝は「百僚に詔して高麗（高句麗）を伐つを議せしむ。数日敢えて言うもの無し」（『隋書』煬帝本紀下）というあり様で、朝廷には厭戦気分が充満していた。すでに前年の楊玄感の乱をきっかけに全土に民衆が決起し、反隋の動きの中心が山東一帯であったことは周知のところである。その年7月、高句麗が形ばかりの降伏を示したのをうけて10月に洛陽にもどった煬帝は、明けて正月、高句麗戦勝を名目に大宴会を催した。そのさい諸外国の使者を最大限招いて、みずからの威厳を誇示しようとしたことが、『隋書』巻4・煬帝本紀下に記される。

〔大業〕十一年春正月甲午朔，大宴百僚。突厥・新羅・靺鞨・畢大辞・訶咄・伝越・烏那曷・波臘・吐火羅・俱慮建・忽論・靺鞨・訶多・沛汗・龜茲・疎勒・于闐・安国・曹国・何国・穆国・畢・衣密・失范延・伽折・契丹等国並遣使朝貢。

戊戌，武賁郎将高建毗破賊帥顔宣政於齊郡，虜男女数千口。乙卯，大会蛮夷，設魚龍曼延之樂，頒賜各有差。

上の史料には 26 国もの名があがりながら（靺鞨は重複するから実際は 25 国），倭国の名は見当たらない。日本側の記録にしたがえば，615 年（隋大業 11 年）正月には犬上御田歆ら一行は隋の都にいておかしくはない。現地に滞在していれば必ず招待され，名を残したはずである。煬帝は高句麗遠征で敗れた汚名返上のために，一国でも多くの外国使節を集め存在感を誇示したかったからである。山東や河北の方面では反乱がいつそう盛り上がり，安心して旅が出来る状況にはなかったこと，そして都の行事に倭国の名が挙がっていないこと，そのような事情からみて，かりに倭からは遣隋使を目的とする使いが出たとしても，隋からみれば使節は来ていなかったとなる。犬上は百済の使者をともなって帰国したことから推定して，旅程は百済止まりであったのではないか。ちなみに上の国名のなかには百済の名前もみえない。

これまでどちらかというと，日本史側の視座と関心から遣隋使の動きが追求されてきたが，対応する隋の国内情勢も視野に入れるならば，遣隋使の理解におお新たな一面を追加できる余地がありそうである。前節で示したように，まだ解決のつかない問題が多く残されており，それゆえ中国史サイドからの踏み込みはいつそう求められている。

3. 「開皇二十年(600 年)の遣使」をどう理解するか

前節で指摘したことをふまえ，中国史の側から遣隋使の問題を見直そうとする場合，何よりも最初に直面するのは、『隋書』倭国伝の開皇二十年の記事をどう理解するかということになるだろう。これはまた古くしてかつ新しい問題である。

さて，この開皇二十年をめぐる，戦前までの主流はその使節はなかったという否定説であった。それを方向づけたのが本居宣長であり，彼はその著『馭戎慨言』で，倭の使者を勝手に名乗った筑紫（九州）方面のものの所業か，西国人の伝えた情報などにもとづいて記したものにすぎないと断じた。戦後になるとその説は支持を失っていくが，しかし開皇二十年への疑問が氷解したかというところではない。最近になっても，たとえば鄭孝雲氏がつぎのような問題点を指摘して，否定説がなお根づよくあることをうかがわせた⁽³⁾。

- ・何故『書紀』に開皇二十年の遣使が記されないのか。
- ・このとき倭は単独で朝貢が可能であったか（倭の五王以来 130 年ぶりの登場）。
- ・開皇二十年記事には隋帝に倭使が謁見した記述はない。

・これにたいして大業3年（607）の記録は、隋帝への謁見、来意説明などがある。

・開皇二十年の記述のなかに、603年に制定された冠位十二階の記述がみえる。

そして鄭氏は、これらの問題を整合的に解決できる方途として、開皇二十年と大業3年の記事は本来一つであった、つまり本来小野妹子に関連する記事であった一部が、まちがって開皇二十年にかけられた、と理解した。

しかしここには一つ問題がのこされる。なぜ記事が付けられたのが開皇二十年という年でなければならなかったのか、それについての説明はできていない。これにたいして、開皇二十年遣使の肯定説では当時の東アジア情勢と倭の国内改革の両面から問題が論じられてきた。それは主につぎの4点にまとめられる。

- ① 当時倭国と新羅の深刻な対立が存在したこと。直接的には推古8年（600）2月、新羅が任那に侵攻し、任那に倭が援軍を送るという対立の関係が存在した。
- ② 隋の文帝による高句麗遠征が開皇18年（598）になされたという衝撃。当時倭と高句麗は密接な関係があり、隋情報は早くに倭に伝えられた。
- ③ 倭国国内の一連の改革が600年直後に集中すること。具体的にいうと、601年2月の斑鳩宮の建立、603年10月の小墾田宮の完成、同12月冠位十二階の制定、604年4月の十七条憲法の発布、同9月に朝礼の改正、暦日の採用などである。
- ④ 関連して、その時期、仏教のことがにわかに問題となること。例えば、603年11月に秦河勝が聖徳太子から仏像を下賜されたこと、605年4月に丈六仏の制作を鞍作鳥に命じたこと、606年太子が勝鬘經と法華經を進講したことなど。

朝鮮半島をめぐる問題で、ちょうど隋という強国を意識しなければならない時期に際会していたこと、そして倭の国内改革や仏教活動の動きが601年以後606年までの間に集中したことに注目すると、開皇二十年という年は遣隋使の派遣を考える上でどうしても必要な年になってくるのではないか。

4. 開皇二十年の政治情勢と遣隋使

このことに関連して、従来ほとんど話題にならなかった問題を補っておきたい。すなわち、600年に倭から使節団が隋に訪れたとすると、かれらは当時新たに都となった大興城（唐の長安城）に行くことになる。そこに至るルートといえば、海路は朝鮮半島の西岸、百済を横にみて北上して、遼東半島の先から渤海湾口を横切り山東半島の登州あたり（隋には登州はない。萊州＝蓬萊郡黄県附近か）で上陸する

いわゆる北路を使ったことが、従来からほぼ一致して認められている。そして上陸後は当時の山東の中心をなす青州（北海郡）——齊州（齊郡）を経て、洛陽をとおり、潼関の関所から大興城のある関中盆地へと進んでいった、と見てほぼ問題ないとする。その間の交通手段は徒歩か車馬で、水運を使う機会はなかった。

かりに登州附近で上陸したとすると、都までの距離は唐の『元和郡県図志』巻 11・登州の条にしたがうと、長安までが 3,000 里、洛陽までが 2,140 里であった。『唐令拾遺』公式令によると、陸路徒歩で公的に移動する基準が 1 日 50 里とされるから、長安まで 60 日がかかった計算になる。その過程で、使節たちは隋の国内の様子、人々の暮らしぶり、高くそびえる塔をもつ寺院や信仰の姿、それらをもの珍しく眺めながら都へと入っていく。都では城壁に囲まれた城門をくぐりぬけると、整然と碁盤目状に区画された広い街路、その間を住民たちが忙しく動き、荷車が物資を満載して行き交う。豪壮な建物の薈が見え、あちこちの建造中の場所からは槌音と掛け声となり響く。活気に満ちた街の空気の中を進み、使節たちは皇城の大門（唐の朱雀門）の前に立ち、ここから宮中へと招じ入れられる。

開皇二十年段階、隋は長年の内政重視によって国力が充実し、絶頂期に入ろうとしていた。だが同時に政治路線が大きく転換されようとしていた。それを直接的に示すのが、長男で皇太子の楊勇の廃位（10 月）、代わって次男の晋王楊広の皇太子任命（11 月）であった。この皇太子の交代劇は、それから遡ること 2 年の開皇 18 年（598）、隋として最初の高句麗遠征に淵源すると、私は考えている。この高句麗遠征は前年に高句麗が「靺鞨の衆万余騎を率いて遼西を寇」（『隋書』巻 81・高麗伝）したことを口実に、漢王楊諒に水陸 30 万の兵力を付けて起こしたものであるが、結果は隋側の大敗北に終わった。そして後日、敗北の責任を押し付けられたのが、宰相として遠征の実質的な責任者として加わった高颯であった。彼は当初からこの遠征には反対を表明していたのである。

高颯は周隋革命以来、一貫して文帝（楊堅）に仕え、隋の基盤を築いてきた人物であったが、ついに翌年、様々な誹謗や陰謀事件などを理由にあげられて失脚させられることとなった。高颯はまた皇太子勇とは姻戚の関係（息子の嫁が勇の娘）で、つねに皇太子を支えていたが、その失脚により翌開皇二十年の皇太子廃嫡へとつながった。他方、晋王楊広を背後から支えたのが楊素であり、楊広が皇太子につくと、601 年（仁寿元年）に彼は高颯失脚後空席であった宰相のポストに任じられた。このように見てくると、開皇二十年（600）という年は、政治の主導権が楊勇・高颯から楊広・楊素へと転換する大きな節目にあたっていたこと、そしてその転換をもたらす契機となったのが、文帝の政治姿勢が内政重視から東アジア拡張路線へと切り替わったことを表明する開皇 18 年の高句麗遠征に求められること、が明らかにな

る⁽⁴⁾。

すなわち、開皇二十年は「文帝—楊勇—高潁」路線から「文帝—楊広—楊素」路線への転換が進行し、政界をピリピリとした緊迫感が包む時期にあたっていた。それに加えもう一つ注意しておいてよい問題がある。仏教である。文帝はもともと仏教に帰依する心がつよかったが、ここにきてそれを政治の場に持ち出した。まず皇太子の交代が完了した直後の12月辛巳の日、「仏法深妙，道教虚融，咸降大慈，济度群品，凡在含識，皆蒙覆護。……敢有毀壞偷盜仏及天尊像・嶽鎮海瀆神形者，以不道論。沙門壞仏像，道士壞天尊者，以惡逆論。」（『隋書』卷2・高祖本紀・12月辛巳の条）という変わった詔が出された。仏法は深妙，道教は虚融，それぞれ大慈を降し，群品（世の人々）を济度する。そのため仏像や天尊像を破壊したり盗んだりするものは不道罪，僧侶で仏像を壊し，道士で天尊像を壊すものは惡逆罪，すなわち最高の十惡にあてて罰する（死刑に処する），という趣旨の命令である。

これにつづいて翌仁寿元年（601）6月の還暦を迎えた当日，文帝はつぎのような措置を下した。すなわち天下の支配に臨んで以来，学校を建て人材の育成に努めてきたが，「徒に名録有り，空しく歳時を度り，未だ徳，代（世）の範と為り，才，国用に任えるもの有らず」と指摘し，「国子学は唯学生七十人を留め，太学・四門及び州県の学は並びに廃す」（『隋書』卷2・高祖本紀・仁寿元年6月乙丑の条）という実質学校廃止であった。そしてその同じ日「舍利を諸州に頒つ」と命じ，以後3度にわたる仁寿舍利事業が開始された。舍利事業とは全土の主要寺院に仏舎利を頒布し，石塔を建てさせ，同一日時にそれを祭らせる，そのことを通じて仏教勢力を取り込み，民心の収攬をはかる意図をもつものである。これこそ，仏教が儒教に代わる国家の柱に押し上げられた歴史上先例のない措置であり，仏教はその時期，政治に決定的影響をおよぼす位置にあったことがわかるだろう⁽⁵⁾。

改めて開皇二十年をはさむ状況を年表風に整理しておくところなる。

開皇 17 年（597） 高句麗の遼西侵攻

18 年（598） 文帝の高句麗遠征と失敗（漢王諒と高潁による）

19 年（599） 8 月高潁の宰相失脚

20 年（600） 10 月皇太子楊勇の廃嫡 11 月晋王楊広が皇太子就任
12 月文帝による仏教への傾斜の鮮明化

仁寿元年（601） 正月楊素の宰相任命。6 月学校の大幅削減・停止，同日舎利の頒布を命令（仁寿舍利事業の開始）

5. 開皇二十年の遣隋使が見た隋の風景

すでに前節で述べたように，開皇二十年は隋代政治史の上で大きな節目であった

と認められる。隋の前半期を動かしてきた高麗を中心とする政治勢力が後退し、楊広―楊素というそれまで背後に押しやられていた勢力が前面に躍り出る。そしてそれを進める背景には、文帝が踏み出した対東アジア拡大路線があり、また仏教を政治とつなげる仏教重視策が存在した。

話を遣隋使にもどそう。今問題の開皇二十年の遣使があったとするならば、かれらはまさにそのような場所に居合わせたことになる。そうであればかれらは、異国人としてつぎのようなことを実感し、心に深く刻みつけたはずである。

- ・統一国家隋の整った支配体制
- ・国力の充実と豊かさ、文明の圧倒的な高さ
- ・新都大興城（長安城）の規模の大きさ、まだ建設途上の新都の活況ぶり
- ・隋朝が表出させつつある東アジアの盟主への野心
- ・緊張した政治的雰囲気
- ・仏教のもつ政治的影響力や存在感の大きさ、仏教の隆盛ぶり
- ・仏教の全土への普及と人々の信奉する姿

さて、4節でも言及したように、倭の国内諸改革が600年のすぐ後から本格化し、短期間で実行されていることがわかっている。さらに厩戸皇子（聖徳太子）が仏教への傾斜をつよめ、また十七条憲法に「二に曰く、篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり」と盛り込み、仏教政策としてそれを意識したのも同じ時期であった。これら一連の動きをよく見てみると、上にあげた事象とことごとく符節があう。つまり開皇二十年の遣使があったとして、かれらが帰国して隋の国内情勢を報告し、それをうけて改革が一気に本格化したと。隋から帰国したものたちは、隋の先進性と豊かさ、その一方で垣間見られた東アジアにたいする野心と政治的緊張感、さらに国を仏教によってまとめようとする政治的姿勢などを伝え、自国の遅れと改革の必要性を説いた結果がそのようになったとみなすことで、倭の動向が説明できる。

かくして、開皇二十年の遣隋使が存在したことが隋の国内状況を分析することからも裏づけられた。だがそのさい、もう一つ大きな問題がのこされる。何故『書紀』ではその重大な事柄が記録されなかったか、である。このことについて、私は従来ほとんど問題にされたことのない角度からの見方を示してみたい。

「倭国伝」によると、開皇二十年の遣隋使は隋の担当官の質問に答えて、自国の遅れや未開性を露呈する発言をして、文帝に強く諭されたことになっている。本居宣長はそのことに反発し、しかも『書紀』に記録がないことから、それが日本（倭）の正式な使節でないものによる所業と断じたわけであるが、その見解は『書紀』が正しいとの前提の上に組み立てられている。また日本史の研究者の説でも、宣長のいうところは認めなくとも、この場合の『書紀』の関係記事にはだれも疑問を差し

挟まない。だが『書紀』は天皇の正統性を説くために、作為や潤色が加えられていることはつとに知られている。

そうした立場から『隋書』と『日本書紀』の成立時期を比べてみると、『隋書』の編纂が唐の貞観10年(636)に本紀(帝紀)5巻・列伝50巻としてなされ、後の顕慶元年(656)に「五代史志」30巻を足して、今日の『隋書』85巻ができあがった。「倭国伝」は列伝であるから、636年にはできていたことになる。これにたいして『日本書紀』は養老4年(720)、舎人親王らによって撰せられた30巻と系図1巻からなる日本最初の正史であった。両者の間には、84年ないしは64年という差が存在する。その間には遣隋留学生として大陸にわたった南淵請安や高向玄理、僧旻らが帰国しており、かれらによって大陸の最新情報とともに多くの典籍・文物がもたらされた。また遣唐使としても、その間に何度か往来があり、使者たちは熱心に典籍の入手に努めたという。

ちなみに9世紀後半に編纂された『日本国見在書目録』を見ると、正史家条に「隋書八十五巻 顔師古撰」としてその名があがり、平安前期までには日本に将来されていたことがわかる。このことは正史『隋書』が決して宮中の秘奥に蔵されたものではないことを裏づけるのであり、唐にとって前朝の記録『隋書』は秘密にされる性格のものでなく、むしろみずからの正統性を裏づけるために積極的に公開されるものであった。そのような過程と事情を考慮すれば、『隋書』は比較的早い段階から日本に来ていた。そして当然のことながら、『日本書紀』の執筆者とされる舎人親王らはこれに目を通していた、と推定できる。

舎人親王らが『隋書』倭国伝を見たとしよう。天皇の正統性と「神国」たる自国の歴史を説く立場からは、その開皇二十年の記事は大変まずいものと映るだろう。そして相手の史書の記載が消せない以上、自国の側でそれを徹底的に無視することが次に取るべき手であり、ここに『日本書紀』に600年の遣隋使が見えない理由が浮かび上がってくる。さらに関連していうと、どうしたことか『書紀』では「隋国(大隋)」という国名は一切使わず、すべて「唐国(大唐)」と改め「もろこし」と訓じてきた。しかし隋と唐が異なる王朝であることは自明のことで、いっしょに扱うことは本来おかしい。にもかかわらず『書紀』はその無理を強引に押し通し、これまでの研究でもそれに特別な違和感も挟んでこなかった。だが開皇二十年の問題を介在させることで、『書紀』が何故隋字を使うことをしなかったのかが見えてくる。そのことから逆に、開皇二十年の遣隋使が存在したことが裏づけられるのである。

おわりに

以上、日本が本格的に国際舞台に踏み出すきっかけとなった遣隋使をめぐって、

その主たる史料となる「倭国伝」と『書紀』における課題の整理分析から、開皇二十年の遣隋使の理解問題に進み、中国史の視座から押さえなおすことで開皇二十年遣使の存在した必然性を論じた。ではその折、かれらは隋で何を見、何を感じ取って帰国したか、その問題を隋の社会や政治情勢と関連づけて考察し、厩戸皇子（聖徳太子）による一連の改革や仏教政策にまでつながることに言及した。

なお仏教ということであると、かれらが通過したであろう当時の山東青州一帯の寺院址からは、非常に精密に彫られた気品に溢れる石仏が近年続々と見つかり続けている。例えば青州市龍興寺址からは北朝後期から隋代の数百点の石仏、諸城市（北朝・隋唐期の膠州・密州）附近から同じく北朝・隋代仏教石刻が数百点、臨朐県明道寺遺址からまた北朝・隋代のものが破片を含め 1,200 点余など、である⁽⁶⁾。遣隋使一行はそれらの一部を目の当たりにして深く感動し、仏像情報も自国に伝えたのではないか。そうしたことが飛鳥仏に影響を与えないはずはないと思うが、本稿ではこれ以上にその問題には踏み込めるだけの準備はない。後日改めて系統的に集約してみたい。

遣隋使の研究は史料的制約のなかでまだ多くの課題をのこしているが、中国史の視座と新たに発見される諸資料を組み入れることで、なお一歩前に進めることが可能であると考えている。小野妹子遣隋使派遣 1,400 年という機会をとらえ、さらに全体像と歴史的意義の解明をはかる所存である。

最後に本稿では、日本史側の膨大な先行研究のなかの一部を押さえただけで、多くの漏れがあることをお詫びしなければならない。中国史側のそれもまだ網羅できていない。本稿で参照にさせていただいた先行研究は最後の《参考文献》一覧に掲げた。重要な研究が落ちていること、また注などで個別研究に言及できなかったことをご容赦願いたい。これら先行の成果については別の機会で取り上げることを考えている。

注

- (1) 本稿で拠った『隋書』では、注釈書として石原道博編訳 1985『新訂 魏志倭人伝・後漢書 倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝—中国正史日本伝（1）—』（岩波文庫）を参考にした。
また『日本書紀』では日本古典文学大系本（岩波書店、1965 年）を主に用いた。
- (2) 増村宏 1968「日出処天子と日没処天子——倭国王の国書について」『史林』51-3、1970「日出ずる処と日没する処について—栗原氏の批判に答える—」『鹿大史学』18。いずれも同氏著 1988『遣唐使の研究』同朋舎出版、所載。
- (3) 鄭孝雲 1999「遣隋使の派遣回数再検討」『立命館文学』559。
- (4) この時期の政治動向については、氣賀澤保規著 2005『中国の歴史 6 絢爛たる世界帝国隋

唐帝国』講談社，第1章参照。

- (5)山崎宏 1942「仁寿年間に於ける送舍利建塔事業」同氏著『支那中世仏教の展開』清水書店所載，氣賀澤保規 2001「隋仁寿元年（601）の学校削減と舍利供養」『駿台史学』111，参照。
- (6)諸城市博物館「山東諸城発現北朝造像」『考古』1990-8，杜在忠・韓崗「山東諸城仏教石造仏」『考古学報』1994-2，臨朐県博物館「山東臨朐明道寺舍利塔地宮仏教造像清理簡報」『文物』2002-9，山東省青州市博物館「青州龍興寺仏教造像窖藏清理簡報」『文物』1998-2など参照。

《参考文献》

- 茂在寅男・西嶋定生ほか著 1987『遣唐使研究と史料』東海大学出版会。
- 西嶋定生著 2000『古代東アジア世界と日本』岩波現代文庫。
- 堀敏一著 1993『中国と古代東アジア世界』岩波書店。
- 堀敏一著 1998『東アジアのなかの古代日本』研文出版。
- 増村宏著 1988『遣唐使の研究』同朋舎出版。
- 池田温 1971「裴世清と高表仁—隋唐と倭の交渉の一面—」『日本歴史』280。
- 金子修一著 2001『隋唐の国際秩序と東アジア』名著刊行会。
- 川本芳昭 2004「隋書倭国伝と日本書紀推古紀の記述をめぐって—遣隋使覚書—」『史淵』141。
- 栗原朋信著 1978『上代日本対外関係の研究』吉川弘文館。
- 川勝守著 2002『聖徳太子と東アジア世界』吉川弘文館。
- 韋蘭春 1998「隋代の中日関係—607年の遣隋使を中心として—」『國學院大學日本文化研究所紀要』82。
- 高寛敏 2000「倭隋外交をめぐる諸問題」『東アジア研究』29。
- 高明士 1999「隋唐使の赴倭とその儀礼問題」『アジア遊学』3。
- 李成市 1998「高句麗と日隋外交—いわゆる国書問題に関する一試論—」『古代東アジアの民族と国家』岩波書店。
- 高橋善太郎 1951「遣隋使の研究—日本書紀と隋書との比較—」『東洋学報』33-3,4。
- 森克己著 1955『遣唐使』至文堂。
- 鬼頭清明 1976「推古朝をめぐる国際的環境」『日本古代国家の形成と東アジア』校倉書房。
- 坂本太郎著 1979『聖徳太子』吉川弘文館。
- 坂元義種 1980「遣隋使の基礎的考察—とくに遣使回数について—」『日本古代の国家と宗教』下巻，吉川弘文館。
- 松枝正根著 1994『遣隋使・遣唐使・渤海使』（“古代日本の軍事航海史”下巻）かや書房。

吉田孝著 1999『飛鳥・奈良時代2 日本の歴史』岩波書店。

吉村武彦著 2002『聖徳太子』岩波書店。

鄭孝雲 1999「遣隋使の派遣回数再検討」『立命館文學』559。

篠川賢著 2001『日本古代の王権と王統』吉川弘文館。

篠川賢 2001『飛鳥の朝廷と王統譜』吉川弘文館。

曾根正人著 2007『聖徳太子と飛鳥仏教』吉川弘文館。

鐘江宏之著 2008『律令国家と万葉びと 飛鳥・奈良時代』(全集 日本の歴史第3巻) 小学館。

飯塚勝重 1966「礼楽よりみたる古代日本と中国との交渉—開皇七部伎の定置と倭国伎とをめぐって—」『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』。

表1 遣隋使関係資料比較対照表

回	『隋書』	『日本書紀』推古紀
1	開皇 20 (600) (倭国伝) 倭王 (阿每多利思比孤)「遣使詣闕」、 使者が日本の状況を伝える。	
2	大業 3 年 (607) (倭国伝) 小野妹子の最初の遣使。 倭王「遣使朝貢……兼沙門数十人来学仏法」、 「其国書曰日出処天子致書日没処天子無恙云々、帝 (煬帝) 覽之不悦」	推古 15 年 (607) 秋七月戊申朔庚戌、大礼小野臣妹子遣於大唐。
3	大業 4 年 (608) (煬帝本紀) 三月壬戌「百濟・倭・赤土・迦羅舍国並遣使貢方物」	
4	大業 4 年 (608) (倭国伝) 裴世清の遣使 文林郎裴世清を倭国に遣使※。百濟→竹島→舩羅国 (耽羅、濟州島)→都斯麻国 (対馬)→一支国 (老岐)→竹斯国 (筑紫)→秦王国 (畿島・周防?)→十余国→海岸 倭王、小徳阿輩台に数百人の儀仗を従え、鼓角を鳴らして来迎。 10 日後、大礼哥多毘、二百余騎を従えて「郊勞」→使者都に至り、王と面会。 王曰「我聞海西有大隋、礼儀之國、故遣朝貢、……冀聞大國惟新之化。」 裴世清答曰「皇帝 (煬帝) 德並二儀、沢流四海、以王 (倭王) 慕化、故使行人 (裴世清) 来此宣諭」→送別の宴を設けたのち帰国。 →裴世清につけて使者を出し「来貢方物」→ (此後遂絶) ※『三国史記』百濟本紀卷 27 : (百濟・武王) 九年 (608)、遣使入隋朝貢。隋文林郎裴清奉使倭國、經我國南路。	推古 16 年 (608) 隋使裴世清の来訪 夏四月 妹子「至自大唐」、「大唐使人裴世清・下客十二人、從妹子臣至於筑紫。」 「為唐客更造新館於難波高麗館之上」 六月壬寅朔丙辰、客等泊于難波津、… …安置新館。 (妹子、唐帝の書を百濟に掠取されたと奏上。流刑に当たるところを赦される。) 秋八月辛丑朔癸卯、唐客入京、壬子、召唐客於朝庭。…大唐之國信物置於庭中、…裴世清親持書、兩度再拝言上使旨而立之。其書曰、「皇帝問倭皇、…知皇介居海表、撫寧民庶、境內安樂、風俗融和、…朕有嘉焉、…」 丙辰、饗唐客等於朝。
		推古 16 年 (608) 裴世清の帰国、妹子 2 度目の遣使 九月、辛巳、唐客裴世清罷歸。 天皇聘唐帝、其辭曰「東天皇敬白西皇帝、……」 是時、遣於唐國學生倭漢直福因、奈羅詔語恵明、高向漢人玄理、新漢人大國、學問僧新漢人日文、南洲漢人請安、志賀漢人恵隠、新漢人広濟等并八人也。
	大業 4 年 (608) ? (流求国伝) 明年 (大業四年?)、帝復令〔羽騎尉朱〕寬慰撫之、流求不從、寬取其布甲而還。時倭國使来朝、見之曰、此夷邪久國人所用也。	
		推古 17 年 (609) 秋九月小野臣妹子等、大唐より帰国、通事の福利歸らず。
5	大業 6 年 (610) (煬帝本紀) 春正月己丑、倭國遣使貢方物。	
6		推古 22 年 (614) 六月丁卯朔己卯、遣犬上御田歙・矢田部造於大唐。
		推古 23 年 (615) 秋九月、犬上御田歙・矢田部造至自大唐、百濟之使則從犬上君而来朝。